

女神の末裔 第一章



四方をなだらかな山に囲まれた盆地は百年の歳月をかけて開墾され、青々とした水田が拡がっていた。

ヤマト、と人々はこの地を呼んだ。

「ヤマトほど美しいクニはない」

ヤマトの大王の朝は呪言で始まる。払暁、まだ夜明けぬうちに、大王の一族や豪族の長たちが朝廷の廟堂に集う。大王は、奥の神殿で神に呪言を捧げ、しかるのちに廟堂に赴きて政事を行う。太陽が東の空に昇ると、朝議は終わる。

「血の匂いをする」

廟堂に現れた大王は即座に顔を顰めた。夜空が青みはじめていた。生暖かい風が春の訪れを告げていた。群臣は腰を浮かして顔を左右に振り、匂いの源を探った。血は穢れとされる。政事の間には忌み嫌われる。

「然り。血の匂いをする。東の方より漂ってくる」

ギイと廟堂の扉が開いた。人々の眼が扉に注がれた。

ひとの影が闇より現れ、やがて松明の光に照らされた。

「アダヒメ」

人々の顔色が変わった。

身の丈六尺。厚く盛り上がった胸に鉄片を仕込んだ甲冑を巻き、背中に大剣を風き、縮れた髪の毛は結わえずに延びるに任せ、腰を白布で覆い、逞しい腕や長い脚が剥き出しであった。顔は旅塵に煤けて汚れ、甲冑の至る所に剣の打ちつけられた痕跡と肌に刻まれた刀創が禍々しく、手に布に包んだ丸いものを下げていた。

アダヒメは王の間近に歩み寄り、無言で手にした布を放り出した。結び目が解け、中身がごろりと転がった。人の首であった。

「玖賀耳である」

アダヒメは短く言った。群臣がいつせいに立ち上がった。ヤマトの大王家とは敵対していた北の旦波の国の王である。

群臣は息を飲み、大王は不機嫌に頷いた。

アダヒメ。吾田媛と書き現す。大王の皇女である。十六歳。男たちのなかに混じっても頭ひとつ抜け出す長身であった。白い肌にきりりとした美貌であったが、

「アダヒメの眼は狼のように燃えている」

と大王は忌み嫌った。

アダヒメは男に劣らぬ大力であった。一年前、王宮の庭に二人の相撲人が招かれた。出雲の野見宿禰と、当麻邑の蹶速である。群臣の見守るなか、野見宿禰は蹶速の肋骨を蹴り折って、腰骨を踏み砕いた。蹶速は血反吐を吐いて絶命した。

隆々と筋骨の盛り上がった上半身を誇示するように、野見宿禰が右手をたかだかと差し上げると、血に興奮した群臣は歓声を発し、膝を叩いてほめそやした。出雲人たちは得意満面に舞い踊った。当麻邑の人々は蹶速の屍の周囲に集い、悔しげに歯噛みした。

「天下に並びなき大力よ」

大王は高らかに宣言した。

「当麻の地は、汝に与えよう」

そのとき、ぬっと立ち上がって野見宿禰に歩み寄った者があった。アダヒメだった。

「汝、天下に並びなき大力なるか」

アダヒメは静かに言った。野見宿禰は、幼い顔だちと対照的に己よりも上背のある乙女の出現に気押されたが、やがて轟然と顔をあげた。野見宿禰は、アダヒメが皇女であることに気づかなかった。アダヒメは平民と同様、白布の中央に穴を穿ち頭を通して腰紐で結んだ貫頭衣を身に着けていた。布は膝の上までのみ覆い、すらりと筋肉の引き締まった長い脚が剥き出しだった。

「汝は当麻の者か」

「当麻で育った。蹶速とともに育った。彼は、吾が友である」

言うなり、野見宿禰の体が硬直した。アダヒメの右足の爪先が野見宿禰の股間に食い込んでいた。牽丸を蹴り上げられた野見宿禰は眼を見開き、嘔吐しそうに顔を歪めた。両手で股間を覆い、地に膝をついた。

アダヒメは、野見宿祢の頭髪をつかんで仰向けに倒し、踵かかとで首を踏みつけた。脛骨が砕かれ、野見宿祢は絶命した。

「大王よ」

アダヒメは叫んだ。

「当麻の地は、当麻人が治める」

三人の出雲人が剣を抜いてアダヒメに切りかかった。アダヒメは拳を固めて、真先に駆けてきた出雲人の顔面に打ち込んだ。鼻が頭蓋骨にのめり込み歯が飛び散った。さらにアダヒメは、出雲人の股間を蹴りあげた。小柄な出雲人の体が宙に浮いた。地響きをたてて転がった出雲人は、血反吐をはき、痙攣した。睾丸が潰れ陰囊が裂け、股間から血が流れ出していた。

二人の出雲人は怯んだ。

「やめよ！」

大臣の建内宿祢たけしうちのすくねが叫んだ。

「皇女なるぞ」

出雲人たちは剣を収めてひれ伏した。

「大王家の御庭を血で汚さんとした者ども。捕らえて首を打て」

兵たちが命乞いをする出雲人たちを連れ去った。御庭には二つの屍ともはや何の役にも立たない瀕死の肉体が放置された。

翌朝、大王はアダヒメに命じた。

「北の且波の国へ行って、かの地の王を討て」

アダヒメは、

「当麻の地は、当麻人に治めさせよ」

とのみ言い残し北へ旅立った。

「よもや、生きては帰れまい」

大王は、見送りもなかった。

アダヒメは呪われた子だった。

大王の妃にサオヒメ（狭穂媛）という美女がいた。サオヒメは大王の寵愛を受けつつ、兄のサオヒコ（狭穂彦）への思慕を隠せないでいた。

サオヒコが当麻の地で反乱を起こしたとき、サオヒメは王宮を出てともに稲城に立てこもり、大王の軍を迎えた。大王の軍は火を放って稲城を焼いた。サオヒメは、当麻に住む異母妹を王妃として召し入れてほしい、と遺言を残し、兄とともに死んだ。大王はサオヒメの遺言に従い異母妹を迎え、その夜、王宮で交合した。理由は語らなかったが、以後、大王はタカノヒメ（竹野媛）というサオヒメの異母妹とは交わらなかった。

タカノヒメはやがて懐妊した。一度のみの交合で生まれたのがアダヒメであった。アダヒメが一歳になったとき、大王は驚いた。アダヒメは、タカノヒメよりも、彼女の異母兄

にもあたるサオヒコの面影を濃く宿していた。大王はタカノヒメとアダヒメを追放し、当麻の邑へとやった。アダヒメが十二歳のとき、タカノヒメが死んだ。大王は孤児となったアダヒメを哀れがり、皇女として王族に迎え入れた。

だが、大王は現れたアダヒメを見て、驚愕を隠さなかった。美しく成長したアダヒメは、並み外れて背が高く、縮れた毛に端正で鋭い面差だったサオヒコにますます酷似していた。

大王が、且波の地にアダヒメを遣わしたのは、当然、かの地で惨殺されることを予想していたものだった。大力とはいえ女の身で遠い地への旅は、命を落とすのと同じであった。だが、アダヒメは帰ってきた。

「アダヒメ」

大王は叫んだ。

「オオウスの皇子が、朝議に出て参らぬ」

アダヒメはほんの少し首を傾げた。

「汝が連れて参れ」

追い立てるようであった。大王は一刻も早く、呪われた皇女を視界から遠ざけたかった。アダヒメはかすかに頷き、踵を返した。

東の空が茜色に輝きはじめていた。

オオウス（大碓）の皇子の邸は高い塀を張りめぐらし、固く閉じた門の前には、武装した兵が二人、守っていた。

「誰か！」

兵たちは矛を構えて、アダヒメを威圧した。アダヒメは呟くように言った。

「アダヒメ」

兵たちは矛を収め膝をついた。アダヒメは続けた。

「オオウスの皇子に会いたい」

兵たちは首を振った。

「皇子は、誰にも会わぬ」

アダヒメの眼が光った。兵たちはたじろいだ。アダヒメがゆっくりと兵に歩み寄った。

一人の兵が叫ぼうとした。アダヒメはその兵の首をつかんで投げ飛ばした。兵はしたたかに門に頭頂を打ちつけて失神した。もう一人の兵が慌てて矛を突き出した。アダヒメは、片手で矛をつかみ、片手で兵の股間を強く握った。ふぐり玉をひねりあげられ、兵は悲鳴をあげた。アダヒメが突き飛ばすと、兵は呻いて地に転がり、立ち上がることもできず、涙を流し呻きながら悶絶した。

アダヒメは足をあげて門を蹴った。扉は呆気なく蹴破られた。

「兄なる皇子よ」

オオウスの寝屋の扉をあけたアダヒメは息を飲んだ。

室内は香が炊かれていた。絹を敷きつめたなかに、オオウスが二人の美女と戯れていた。三人ともに全裸だった。

「アダヒメか……。帰ってこれたのか」

オオウスは顔をあげ、ぼんやりとした眼をあげて微笑んだ。

「顔が血で穢れている。何人、斬ったか」

門を蹴破ってから寝屋にいたるまで、剣を抜いて斬りかかってきたオオウスの兵十数名を素手で殺した。他にも兵はいたが、みな、息を潜めて隠れていた。

「大王が、朝議に出よ、と」

「汝に、連れて来よ、と命じられたか」

「然り」

オオウスは哄笑した。

「アダヒメ。汝は大王に疎んじられている」

オオウスは、アダヒメに背中を見せた寵媛の乳房を撫でながら続けた。

「だが、汝は王命には素直に従う」

「兄なる皇子よ」

アダヒメは口を開いた。

「兄なる皇子は日継ぎの皇子。やがては大王となる。大王に愛でられる兄なる皇子が、何故に大王の命に背く」

「汝には分かるまい」

オオウスは不機嫌に唾をはき、二人の寵媛に、隣室に下がれ、と命じた。

「アダヒメ」

オオウスは胡座をかい座った。

「ヤマトの王は、何を祭る」

「日輪の女神」

「そう。大王に使える史人たちは吾等は日輪の女神の末裔と語る。日輪の女神より、神鏡、神剣、神璽を授かり、今に伝えているのがその証しと。だが、その言い伝えが偽りであったとしたら、どうなる」

「偽り」

アダヒメは凝然と異母兄を見つめた。オオウスは俯き、指を擦り合わせていた。唇が寂しげに歪んでいた。

「吾らは日輪の女神の末裔ではない。吾らの父祖がまことの日輪の女神の末裔を抹殺し、ヤマトを算奪し、偽りに満ちた神代の史を捏造した」

「兄なる皇子よ。何故、兄なる皇子はそれを知る」

「まことの史を知る者が、国栖にいる」

「国栖」

「然り」

「国栖の民は、いまだ大王家にまつるわぬ逆賊。なぜ兄なる皇子は、それを知る」
オオウスは押し黙った。しばし沈黙した。やがて口を開いた。

「国栖へ行け。行けば、分かる」

アダヒメはオオウスを見つめた。うなだれた兄なる皇子の表情は、不健康な陰りがあつた。腕は痩せ細り、かつての逞しい筋肉は衰え、骨と筋が薄い皮に浮かび上がっていた。

「兄なる皇子よ。汝は病んでいる」

「然り」

オオウスは顔をあげて微笑んだ。

「妹なる皇女よ。汝は慧い」

オオウスは眼を閉じた。

「吾を殺せ。吾を殺せば、大王は汝を恐れる。国栖は且波よりも手ごわい相手。汝は国栖へ遣わされるであろう」

アダヒメはじっとオオウスを見つめた。オオウスの眼に宿っていた弱々しい光が、風に吹かれた燭の炎のように掻き消えそうになっていた。

「兄なる皇子よ。汝はまことに死を望むか」

「汝にならば」

オオウスは寂しげな微笑を浮かべた。

「殺されても、よい」

アダヒメはオオウスの背後に座った。オオウスの瘦せた背中を掻き抱くように両手を前に回した。両手はオオウスの股間に延びた。

オオウスの喉が上下した。ぎゅつと眼をつぶり、唇を歪めた。

アダヒメは、彼の辜丸を一つずつ、両手で握りしめていた。

「その手で……」

オオウスは嘔^{しわが}れた声を絞り出した。

「何人の男を殺したのか……」

アダヒメは無言で力をこめた。丸い辜丸がひしゃげ、抗うように血脈が波打っていた。

「妹なる皇女よ……。覚えているか」

オオウスは声を振り絞った。

「汝が初めて王宮に現れたとき、吾は汝を寢^ね屋^やへと誘った」

当時、異母兄妹の恋愛は禁忌ではなかった。

「汝は、吾のふぐり玉を蹴った。以来、吾は汝を忘れた夜はない」

オオウスの男根が隆々とした高まりを見せていた。異母兄妹の恋は禁忌ではないが、アダヒメの表情に嫌悪感が浮かんだ。眼が狼のように燃えた。

「汝に……ふぐり玉をひねり潰されて死ぬ……望みどおり……」

オオウスの全身の筋肉が固く緊張した。アダヒメは立ち上がった。オオウスの首に腕を巻きつけ仰向けに倒した。オオウスは抗わなかった。アダヒメは大きく足をあげ、オオウスの股間に踵を叩きつけた。アダヒメの踵と床板の狭間で鞆丸は砕け、陰囊が裂けて血が迸った。

オオウスは一声、蛙の鳴くように絶叫した。

大王の目の前に、オオウスの体が投げ出された。

「連れて来た」

大王は眼を見張った。オオウスは、体をくの字に曲げ、白眼を剥き、口から血反吐が垂れていた。かすかな痙攣が、まだ命の絶えていないことを示していた。

「アダヒメ！」

大王は泣くように叫んだ。

「汝は行け。国栖へ行け。行いて、国栖の民を平らげ、悉く攻め滅ぼせ」

史人は文字を扱える人の意である。当時、海の彼方から伝わってきた千の文字を習い覚えているのは、代々の大王家に仕える稗田一族のみであった。

薄暗い稗田の蔵には、竹を平たく切つて紐で繫いだ竹簡が堆く積まれていた。日輪の女神の末裔がこの地に降臨してより今日までの全ての出来事が、この竹簡の山に記されて

いた。

瀕死のオオウスを大王の前に投げ出したアダヒメが、王宮を出てまず稗田の邸を訪れたのは、外征の際には稗田の一族を必ず一人伴うことが義務づけられていたからである。

「口持はいずくに」

アダヒメを出迎えた族長・稗田宿禰はまずこう訪ねた。口持は、アダヒメが旦波まで伴った若い史人である。

「死んだ」

アダヒメは短く答えた。七十歳に近い稗田宿禰はかすかに皺だらけの顔を顰めた。

「平群の山を越えゆくとき、口持は吾を姦そうとした。故に彼のふぐり玉を潰した」

新しい竹簡を拵げ、筆に墨を含ませていた稗田宿禰は、短く「吾田媛、討旦波、誅玖賀耳」とのみ記して筆を握いた。

アダヒメは訝しげに首を傾げた。

「稗田の長よ。吾が如何ように玖賀耳を討ったかを聞かぬのか」

「聞かぬ」

「記るさぬのか」

「稗田の史人の見た出来事の他は、記さぬ」

史を束ねる長老は、竹簡を丸めて閉じながら静かに言った。アダヒメはそれ以上は追求しなかった。

「吾は国栖へ行く」

稗田宿祢は皺だらけの臉をあげて、アダヒメの眼を覗き込むように見た。アダヒメは眼を逸らして言った。

「大王の命である」

大王の命ならば、稗田一族の史人を伴わねばならない。

「では、乙女を伴わせよう」

稗田宿祢は手を叩いた。奴婢が戸を開けて室に入ってきた。宿祢に耳打ちされ、奴婢の姿は消えた。

宿祢は背を丸め、じっと床板を見つめた。アダヒメはかすかに身じろぎした。不安げに瞳が動いた。老人の沼の底の泥濘のような狡猾さが彼女の神経を苛立たせていた。

奴婢が一人の乙女を連れて戻ってきた。髪の毛を左右に分けて結んで肩に垂らし、青い上衣に男童のような白い袴ズボンを穿き、足首を紐で結んでいる。

「阿礼」

稗田宿祢は短く紹介した。阿礼と呼ばれた乙女は平伏した。

稲の茎のようにか細い稗田阿礼は十三歳だった。小柄ではない。衣の上から胸が早くも女の膨らみを見せていた。くつきりとした眉に白い頬。よく動く聡明な明るい瞳。

青く生い茂った稲田をまっすぐに貫く畦道あぜみちを歩く二人に、腰まで水に浸かって稲穂の手

入れをしていた農民たちは畦道に駆け上がり、平伏した。

「皇女よ」

口数が多い。

「伴の兵はいないのか」

アダヒメは首を振った。阿礼は、不安を微塵みじんも見せず言い募った。

「皇女が一人で且波の王を討つたはまことか」

アダヒメは頷いた。

「如何に討った」

「話しても、竹簡に記すわけでもあるまい」

「稗田の蔵の竹簡には記さずとも、皇女の武勲いさおしは、この阿礼の頭のなかに記す」

アダヒメは阿礼を見た。曇りのない笑顔があった。

「何故に」

「吾は全てを知りたい。山々に囲まれたヤマトの外を知りたい。皇女が一人で荒ぶる蛮族の王を如何に討つたかを知りたい」

アダヒメは面倒くさそうに答えた。

「且波の王は吾を見るなり、寝屋に誘った。吾は、寝屋で彼の首を折った。逃げた」

「首を折ったのか？」

阿礼は意外そうだった。

「皇女は、男を殺すときは、ふぐり玉を潰すと聞いたが」

アダヒメはまじまじと十三歳の乙女を見つめた。邪気のない瞳に跳ね返されるようにして眼を逸らした。瞳は執拗にアダヒメを追っている。仕方なく口を開いた。

「ふぐり玉を潰すとき男は泣き叫ぶ。外の兵に聞こえる。且波の王は百人の兵に守られて
いる。吾一人で、百人を殺すことはできない」

「口持は、ふぐり玉を潰されるとき、やはり泣き叫んだのか」

アダヒメは不快を露にした。

「口持は汝の同じ稗田の一族。哀れとは思わぬか」

「思わぬ」

阿礼は淀みなく答えた。

「吾が十歳のとき、口持は吾の股をまさぐった。十一歳のとき、唇を吸った。十二歳のとき、口持は吾の婢を無理強いに犯した。吾は口持が嫌いだった。憎んでいた。彼が泣き叫んで死んだのならば、吾は嬉しい。口惜しいのは、女が男を殺す術があると知っていたら、吾みずから口持を殺してやりたかった」

「できることなら……と阿礼はまなじりを引き締めて言い募った。

「吾に教えてほしい。男のふぐり玉を如何に潰すか」

アダヒメは冷たく突き放した。

「史人の乙女よ。汝の役目は記すことである」